九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

ロシアの性愛論 : ソロヴィヨフとベルジャーエフ

青山, 太郎
九州大学言語文化部

https://doi.org/10.15017/5436

出版情報：言語文化論究. 8, pp.215-228, 1997-03-01. Institute of Languages and Cultures, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

ロシアの性愛論 III
ソロヴィヨフとベルジャーエフ

青 山 太 郎

1

ショーペンハウエルにとって性愛は種の目的に仕える手段であり、種の存続を保証する性行為に行き着くものでした。それに対しソロヴィヨフは、強度の性愛が必ずしも性行為とは結びつかず、性行為を目的としないどころか、かえって性行為を排除すること、性愛が種の目的たる生殖に仕える手段ではないことを明らかにしました。ソロヴィヨフによれば、人間の男性と女性への分裂自体が既に全一的人間像の崩壊であり、死の始まりでした。両性への分裂の内にあることは、既に死への途上にあることです。全一性を回復した人間でないかぎり、人は必ず死ぬというのがソロヴィヨフの主張です。

動物界を支配するものは、個体を犠牲にした種属の存続という自然法則です。種の維持は、生まれては死んでゆく有限な個体の限りない連続により保証される。しかるに人間とは、動物にとって至高の目的であるこの自然法則の内に安らいえぬ存在であって、その現れが人間にのみ固有の性的羞恥心であること、これは既に述べたとおりです。有機界を遍く支配している自然法則そのものを人間が恥じるということは、人間が超自然的・超動物的存在だということであり、この羞恥心においてこそ人間は真に人間たりうるということです。自然は永遠に生き、永遠の美を謳歌していますが、この自然という盲目的力は、そこで生まれ滅び交替しゆく個体には無関心であり、このことはショーペンハウエルも指摘したとおりです。

性行為は限りない自然的発展を象徴する行為です。人間はこの行為を恥じることで、自然的発展が体現する無限を、自らに値しないものとして斥ける。自然的発展の手段ないし道具にすぎないことは、人間の尊厳に相応しくない。精神的存在である人間は、世代の交替という自然法則に従うことを欲しない。この自然法則とは、個体にとって永遠の死の法則にほかならないからです。人間は限りない生の充実を自ら体現するという望みを、またその可能性を、たとえ漠然とではあれ意識している。個体の死と種属の不死という自然法則に満足しない人間は、永遠の生の道具となるのではなく、自ら永遠の生の所有者たることを欲します。

創造力が肉体的個体の再生産という外的活動に使い果たされてしまわないで、何らかの分野での精神的創造という内的活動に向けられ、それによりさまざまの文化的作品を生み出してくるような人々がいます。文化の発展は彼らに負うところが大きい。こういう人々を天才と呼びます。彼らはたとえ自らの子孫は残さずとも、その作品によって後世に永く生きるわけで、この場合は不死への欲求が外的・肉体的フォルムをとらず、内的・精神的フォルムをとって実現したものだと言えます。彼らの作品とは、かたちを変えた彼らの子供なのです。このことは既にプラトンも指摘しています(『饗宴』209E-D)。しかしソロヴィ

ヨフによれば、真の天才とはなにも少数のエリートだけを指すのではありません。万人の内にあって、地上の自然法則の空しい悪無限に警告を発しているもの、性的羞恥心というかたちでこの自然法則に反逆するもの、これが真の意味の天才なのであり、万人は天才の萌芽を自らの内に秘めている。われわれは誰しもみな潜在的な天才なのだというのです。

2

ソロヴィヨフは、両性への分裂の内にあることは死への途上にあることだとして、性分裂を超えた全一的人間の再興を説くわけですが、その際ソロヴィヨフは男や女に向かって、男や女であることをやめよと言っているわけではないのです。むしろ、性を超えるためには、人間はあくまで性に固執しなければならないと言っています。性の分裂を乗り越える道は、性の滅却の内にあるのではなく、逆に性を強化し豊かなものとしてゆくことの内に求めらるべきだというのです。この考え方は逆説的でなかなか面白いのですが、われわれ並の人間は所詮いかにしても男か女でしかありえないわけで、性分裂を超えた全一的人間なぞと言われても、それが実際にどのようなかたちをとるものか戸惑うばかりです。そこで、もう少し詳しくソロヴィヨフの所説を見てみます。

分裂した両性を再結合させ、人間の全一性を回復させんとする衝動が即ち性愛であるとするなら、男女のあるべき性関係とは、この回復さるべき全一性に基いたものでなくてはなりません。すなわち、男女が性のパートナーを互いに全一的な人間として扱うたぐいの性関係であるべきです。しかるにこんにちでは、このあるべき性関係についての規範が見失われ、性生活において何が正常であり何が異常であるかについて、世人は非常に誤った観念を抱いている。ここでソロヴィヨフは、当時西欧で出版されていた性倒錯に関する著作(A. ビネの『愛におけるフェティシズム』1888, R. v. クラフト＝エビングの『性的精神異常』1886等)に言及しています。これらの著作を読むと、ひとは人間の性倒錯がどこまで及ぶものかを知って、確かに驚かざるをえない。しかしそれにもまして驚くべきは、これら症例を蒐集記述する医師・学者たち自身に、性関係の規範についての明確な理念が全く欠如していることで、それゆえ性生活における正常と異常の区別が曖昧で恣意的なままであることだ。彼らはただ、頻繁に見られるものが正常で、稀にしか見られないものが異常だと思っている。頻繁に見られる異常が、頻繁だというだけの理由で正常と見なされることから、とんだグロテスクな結果が生じかねない。例えば、性交不能に陥った若い男性の患者に裸体画等の猥褻な絵を見せて、その結果患者が娼家へ頻繁に出入りするようになれば全治したとみなされる等。いったいこのての治療をする医師たちは、自分たちの治療が上首尾に運べば運ぶほど、患者が医学の他の分野の顧客とならざるをえないこと、精神科の勝利が皮膚科の多忙をきたす結果となることに、思い至らないのだろうかと、ソロヴィヨフは憤慨しています。こうした事情はソロヴィヨフによれば、現代社会において正常とみなされている性関係が、その実いかに異常であるかを物語るものです。

さまざまな性的異常のひとつに、フェティシズムという現象があります。のちにフロイトが性目標倒錯のひとつと呼んだもので、主として男性に見られるものですが、髪・手足等女体の一部、あるいは下着・衣服その他の事物が性対象の代理となる症状です。フェティシズムの本質は、部分(フェティシュ、呪物)が全体にとって代わっていることで、これは病的で異常な現象であるとされています。しかし考えてみれば、髪や脚が異性の身体の一部であるとするなら、女体そのものもまた女性

の一部にすぎません。ここには明らかに本質的な違いはなく、違いがあるとしたら、女の手や脚が女体全体より表面積が少ないというだけにすぎない。しかるに、女体に魅力を感ずる多くの人々は、彼らが圧倒的多数だというだけの理由で、性倒錯とはみなされず、治療を受けることもありません。もしも身体の一部が全体にとって代わる性関係を異常とみなすなら、性欲を満足させるために、女の体を心から引き離して自由にする性関係もまた性的異常であり、フェティシズムです。こんにちの人間は大部分がこの種のフェティシストであるにもかかわらず、これが頻繁に見られるというだけの理由で彼らは正常とされている。性欲が、つまり性交への欲求が、それが欲求であるがゆえに満たされるべきであるというのなら、髪のフェティシストの欲求もまた満たされるべき当然の権利を有しています。女体のフェティシストと髪のフェティシストの間に、本質的な違いは何もない筈ですから。

3

人間の低次の本質を高次の本質から引き離して成就するすべての性関係を、ソロヴィヨフは弾劾するのであり、このことこそ性関係における正常と異常を分ける唯一の規範だと言うのです。そもそも人間とは種々の次元から成る多元的存在ですから、或る次元にとって正常なものも、他の次元にとっては、つまり全一的人間にとっては、異常たりうる。

ソロヴィヨフは人間本性の内に三つの次元を区別します。第一は動物的次元であって、性交により性欲を満足させることは、動物としての人間にとっては全く正常なことですが、道徳的存在としての人間は、これを自らの高次の本性に相応しくない行為と見て恥じます。

第二は社会的次元で、社会的動物としての人間は、社会的・道徳的要求から性関係に外的な制約を加え、家族的結合を形成することで性を社会的目的のための手段としますが、これもまったく正常なことです。しかし家族的結合も所詮は外的・物質的結合にほかならず、この次元の人間、つまり社会的・道徳的法に適応した人間といえども、未だ全一的人間ではありません。

人間には動物的本性と、これの社会的・道徳的法への順応のほかに、さらに第三の次元があります。すなわち、精神的・宗教的次元です。この第三の次元こそ、順位の上から言えば最初に位置すべきものであり、全一的状態を回復した人間にとって完全に相応しいものです。性関係における肉体的結合と、社会的・道徳的秩序に適った合法的結合（これらはいずれも、人間を死から救うことはできない)の前に、先ずこの神における結合がなくてはならない。動物的本性と社会的法という低次の二要素は、各々自然に適ったものではありますが、これをより高次の要素から引き離したり、あるいはこれらを高次の要素そのものと見なしたりすれば、たちまち自然に反するものとなってしまう。つまりそこには異常な性関係が生じざるをえない。

性関係ににおいて、動物と同じく野放図に、精神的同意なくして一途に性欲を満足させることは、人間本性に反することです。しかしまた、専ら社会的・道徳的目的から、法によってのみ結ばれ維持されているような両性間の結合に甘んじ、より高次の精神的結合に思いを至さないことも、人間本性に相応しくないことであり、反自然的なこと、異常なことです。

しかるに、全一的人間の見地からすれば逸脱であり、本来従属的であるべきこれら二つの性関係のあり方が、われわれの性生活にあっては支配的となり、正常と見なされている。両性間の三つの関係(動物的生の内なる関係、法的生の内なる道徳的関係、神による結合という精神的生の内なる関係)は、それらが綜

合されるときはじめて人間にとって自然であり正常なのであって、別々に切り離されたり、正しい釣り合いによらず組み合わされたりすると、自然に反する実現を見ることとなります。

繰り返しますが、性関係における究極の絶対的規範とは、全一的人間の再興です。つまり、その性関係が全一的人間を再興するものか否かが、正常な性関係と異常な性関係を分ける規範となるのであって、この規範が何らかのかたちで損なわれるところには、必ずや性倒錯が生じます。ここで言う性倒錯とは、同性愛や異性の下着への偏愛といった狭義の性倒錯ではなく、規範からの逸脱という広義の性倒錯です。こんにち行われている性生活とは、殆どがこの意味での性倒錯だとソロヴィヨフは言うのです。精神科医たちが相手どる異常性愛のさまざまな症状、つまり狭義の性倒錯とは、広義の性倒錯を極端にまでつきつめたものに他ならない。われわれにフェティシストたちを咎める資格はありません。

4

性愛のめざすところは全一的人間の回復であって、その際性行為はなんら不可欠ではない。それなしですますこともできる何ものかです。ソロヴィヨフは、性行為を控えるべきだとは言わない。彼は性行為を斥けはしないが、特に勧めもしない。男女の全一的な交わりの一環としてならば性行為もありうる。大切なのは、これに先立つ神の内なる結合があるかどうかだ、というわけです。これはよく言えば柔軟な考え方であり、悪く言えば曖昧です。

同様に、完全な結婚にあっては、子を産むことは不必要であり、また不可能でもあります。なぜなら男女の完全な結合にあっては、喪われた全一的人間の回復という目的は既に達成されてしまっているのですから、この目的を託すための子孫を産む必要はなんらないからです。

しかし、時空の内なるこの地上の生にあっては、完全な結婚というものはありえないでしょう。それは時間の外に、永遠と不死の内に、神の国に生きることでしょうから。それゆえ完全な結婚とは、結婚の最終目標であって前提ではありえない。ちょうど屋根から家を建て始めることはできないようなものです。

性行為がなしですますこともできるものだという主張から、これをなしですますべきだという主張へはほんの一歩です。おそらくソロヴィヨフはそう考えていたのでしょう。彼は性行為を、人間の動物的次元での営みと見ていたのですから。彼は天上のアフロディテとしての性愛を正当化することはできたが、性行為そのものを正当化することはできなかった。性行為とその結果たる生殖は、万人向けアフロディテに属するものでした。性行為への否定的態度という点で、ソロヴィヨフはトルストイと一致します。二人の性愛に対する考え方は、一見非常に違っていますが、よく考えると、ソロヴィヨフはトルストイの性交忌避の主張に、トルストイよりも一層精緻な論拠を提供したものだと言えます。ただしトルストイは、性行為を正当化する唯一のものとして生殖を肯定しましたが(この点でトルストイと教会は同意見)、ソロヴィヨフはさらに徹底していて、生殖を斥けます。人間の全一性回復をめざす彼の性愛論には、性行為や生殖の入り込む余地はないのです。

5

ソロヴィヨフの性愛論をさらに詳細に展開したのがベルジャーエフです。性交忌避の傾向はここではさらに一層つきつめられています。ニコライ・ベルジャーエフ(1874-1949)はソロヴィヨフの次の世代に属し、二十世紀初頭の所謂ロシア・ルネサンスを代表する思

想家のひとりですが、十月革命後の二十年代、ボリシェヴィキ革命に敵対的な思想の持主としてソヴィエト・ロシアから追放され、はじめドイツに、次いでフランスに居を移し、以後ここで旺盛な著作活動に従事し、西欧で最も名の知られたロシアの思想家となりました。

性愛の問題は早くからベルジャーエフを捉えており、彼はその著書で再三これに触れています。1907年の著書『新たな宗教意識と社会性』ではこう言っています――世界の哲学史のうえで、性と愛についての偉大な教説をわたしは二つしか知らない。すなわちプラトンの『饗宴』とソロヴィヨフの『愛の意味』は、このテーマをめぐる著作のうちで最も深く、最も透徹している、と。「プラトンはキリストの出現以前の人だが、既に個体性の悲劇を理解し、超越的なものへの憧憬を感じ取り、此岸と彼岸の仲介者たる神的エロスの結合力を洞察した。プラトンの教説は神話のかたちを纏っているが、それによれば、性は原初の一なる強力な人間本性が分裂した結果生じたもの、つまり個体が二つの半身へと割れて生じたものである。愛は完き個体への再統合をめざす悩ましい希求であり、個々の半身が自らの片割れを見いだそうとする志向、つまり個々の性が自らの対の性を見いだそうとする志向であり、個体性を再興しようとする秘かな渇望である。プラトンは天才的・神的な力をもって、天上のアフロディテと万人向けアフロディテの違いを把握した。すなわち、個体の不死へといたる神的・個的愛と、卑俗で自然的な没個的・種的愛の違いを明らかにした。＜・・・＞ VI.ソロヴィヨフは個と種の対立関係を明らかにした。種的な愛、産むための愛、個体性を打ち砕く愛は、彼にとって卑俗なアフロディテであり、自然的必然性への隷従である。真の愛は常に個的であり、永遠を、個体の不死をかち取る。真の愛は産むことによって個体を打ち砕くことなく、完き個体性の充実へと行き着く」(第六章、性と愛の形而上学)。

ソロヴィヨフは性愛と性行為を截然と区別しましたが、未だ性行為を完全に否定するには至らなかった。性愛は性行為と直接的関係を有さず、性行為なしでも可能だが(そしておそらくは、性行為なしですますことができればそれに越したことはないが)、真の性愛が結果として性行為を要求するならばこれを拒むにはあたらない――ソロヴィヨフは男女間の性行為についてほぼこう考えていました。ベルジャーエフは百尺竿頭に一歩を進めて、断乎性行為そのものを斥けました。

以下彼の所説を、その著書『新たな宗教意識と社会性』、『創造の意味』(1916)，『人間の使命について』(1931)等によって見てみます。

6

プラトンの両性具有の理念を、ベルジャーエフはキリスト教の立場から解釈しなおします。つまりプラトンの言う両性具有を、キリスト教で言う陥罪(正教用語。カトリックで言う堕罪)以前の人間の姿、神により神の似姿として創られたという原初のアダムと同一視します。その際ベルジャーエフは、十七世紀ドイツのプロテスタント神秘主義者ヤコプ・ベーメ(1575－1624)の両性具有論から大きな影響を受けています。両性具有の両性への分裂を人間の陥罪と重ね合わせる試みは、中世のユダヤ教神秘思想たるカバラに既にあり、十九世紀ではフランツ・フォン・バーデル(1765－1841)にあるそうで、また非キリスト教化したかたちではワイニンゲルに見られますが、ベーメのそれはこれら両性具有論のうちで最も深い、とベルジャーエフは言っています。

ベーメによれば、神の似姿として創られた原初のアダムは、男でも女でもなく、処女にして若者であるような両性具有者でした。そ

のアダムは、自らの肉欲ゆえに処女たるソフィアを喪い、肉欲において女性たるエヴァを得た。ベーメは処女と女性を区別します。原初のアダムが自らの内に擁していた処女とは、神の叡智にして神の似姿たるソフィアであり、人間の永遠の処女性たるソフィアは、アダムの陥罪により天へ翔び去ってゆく。両性具有者の転落は処女ソフィアの喪失であり、この世の女性たるエヴァの出現であった。

ベーメのソフィア論は、人間の喪われた処女性への憧憬であり、ダンテやゲーテやソロヴィヨフに見られる「永遠に女性的なるものEwigweibliche 」へ跪拝も、これを不完全なかたちで言い表したものに他ならないと、ベルジャーエフは言っています。

両性具有者の男性と女性への分化とは、アダムのコスミックな転落の結果であり、その意味で人間の陥罪は性と結びついています。自然的必然性に縛められた罪深い人間の生には、両性具有者の転落、神の似姿の歪曲、男性と女性への分化、その結果生じた自然的必然性への人間の隷従等が先行しているわけです。

原初の母たるエヴァというかたちで女性的要素が分離したことは、世界の内で男性的なものと女性的なものが分かれたことでした。分化し分裂した性は、世界の内なる不和の源泉、結合への救いない渇望の源泉となった。両性具有者としての人間は崩壊し、自然的・女性的要素を己れから遠ざけ、世界から疎外され、女性的自然の奴隷となってその支配下に入る。自然的なものは男性にとって内的に無縁なものと化し、それゆえ外的に強制的なものとなる。女性は、男性の根源的にしておそらくは唯一の弱点となった。つまり、彼には恐ろしいまでに無縁と化した自然に、彼を隷従させ繋ぎとめる一点となった。

エヴァへの性衝動の一点において、アダムは自然的必然性に縛りつけられている。女性こそは性的自然力の担い手、性における盲目的自然力の担い手であり、性の種的不可抗力とは、女性的自然力のことです。この自然力は、人類の始祖たる女性エヴァを通して世界を支配した。人間は多産なるエヴァに執着することで種的性衝動の支配下に入り、自然の奴隷となった。種の自然力とは、人間の転落によって生み出されたものです。しかし同時に男性は、喪われた女性的本性への性的愛着を通して、自らの両性具有像を再興しようとします。陥罪による全一的人間本性の崩壊も、人間の内なる根源的な両性具有性を、つまり神の似姿を、完全に滅ぼし尽くすことはできなかったからです。

7

性愛のめざすところは種の維持であるというショーペンハウエル流の考え方を、ベルジャーエフはソロヴィヨフ同様に斥けます。ショーペンハウエルの言う性愛とは、プラトンの言う万人向けの卑俗なアフロディテにすぎない。天上のアフロディテについてショーペンハウエルは何も語らなかった。しかるに、性愛の真の意味を探るべきは天上のアフロディテの内にであって、二柱のアフロディテを混同するのはとんでもない間違いだというのが、ソロヴィヨフの考えでした。ベルジャーエフもまた、ショーペンハウエルやローザノフは性愛の内に産むための性しか見ておらず、性愛の内には種の衝動と並んで、これに敵対する個の衝動もまた存在することに気づかず、その結果性と種を混同し、性を種に還元してしまったとして、ショーペンハウエルやローザノフを批判しています。ワシーリー・ローザノフ(1856－1914)はソロヴィヨフと同世代の思想家で、ソロヴィヨフやベルジャーエフとは正反対の側面から性の問題をとり上げた人です。ローザノフについてはのちに触れます。

さらにベルジャーエフは、個的なものと種

的なものというソロヴィヨフの考えを推し進め、世界をこれら二つの形而上学的原理の戦いの場であると考える。

個体を選び取る愛、人間を動物から区別するばかりか、個人を他の人々から区別する愛は、種の自然力の内には存在せず、また存在しえない。生物学は、出生率と個体性が反比例することを教えています。有機体の力が種の存続に向けられれば、完き個体性創造のための力は自ずと減少する。この生物学的真理はさらに深い形而上学的真理を有しているのであって、ここに現れているのは、完き永遠の個体性を創造するか、それとも個体性の崩壊を許し、不完全な多数の個体を創造するかというディレンマなのです。人間は個たりえず、永遠と完成に到達しえないがゆえに、自らの子孫にさらなる完成を託し、個体性を実現しえぬ苦しみを、個を産むことの内にまぎらせます。種的性愛は個体性を破壊し、種の不死をめざす。つまりそれがめざすのは、一つの完全な個体の創造ではなく、多くの不完全な個体の創造であり、悪無限であり、永劫回帰です。

誕生と死は同じ起源を有しています。ハデスとディオニソスが同じ一柱の神であるというヘラクレイトスの言葉は、既に引きました。誕生と死はどちらも崩壊した世界の所産であり、世界の内なる時間の王国です。ベルジャーエフにとって、崩壊しているのは人間の全一性ばかりではない。世界そのものの全一性もまた崩壊している。世界は自らの意味と源泉(神)から離反することで、何よりも先ず時間的となり、時間的連鎖と化した。そこに生じたのが誕生と死の永遠の交替という悪無限です。この損なわれた世界の内ではいかなる存在も永遠ではなく、世界のあらゆる部分・あらゆる状態は一過的であり、やがて朽ち果てる運命にある。生まれるものは必ずや死すべき運命にある。産むことは、それ自体全一的個体性の破壊であり、部分への崩壊であり、個体が完成と永遠を達成しえないことのしるしです。種存続のための愛は、自然が損なわれ死すべきものとなったことの結果であり、同時に、この死すべき性格の固定化であり法則化であって、自然の内に生者必滅の法則が勝利したことのしるしです。

種的性愛は、性の分裂の外見的で虚妄な克服にすぎない。完き永遠の個体性は、そこでは回復されない。種的衝動は性の懊悩を決して癒さず、これに次々と新たな形態を与えつつ、これを時間の内に限りなく引き延ばす。種的本能の内なる種の自然力を肯定することは、個体性を破壊し、時間の内なる不完全なもの・死すべきものを、つまり悪無限を、結果させることです。いっぽう性の懊悩とは、両性の悲劇的断絶を乗り越えようとする渇望であり、融合によって永遠の完き個体性を達成しようとする希求です。

性愛の内には個の原理と種の原理という互いに相容れない二つの原理がからみ合っており、両者の間には単に経験的なばかりか形而上学的な対立があるというのは、こうした意味です。

8

ベルジャーエフにとって、性とは克服さるべきものです。性とは断絶であり、この断絶がある限り完き個体性は未だ存在せず、それゆえ完き人間は存在しない。このことを彼はプラトンの両性具有の神話やベーメのソフィア論を手掛かりに展開したわけですが、この頃西欧にも、ベルジャーエフとは独立によく似た性愛論を展開した人がいます。オットー・ワイニンゲル(1880－1903)はプロテスタントに改宗したウィーン在住のユダヤ人ですが、早熟な天才で、弱冠23歳にして『性と性格』という本を著し、その数カ月後にピストル自殺をして果てました。著者の死後この本は俄に反響を呼び、主としてドイツ語圏において

ですが、二十年代まで度々版を重ねました。ストリンドベリやフロイトがこの本に注目し、ベルジャーエフもしばしばワイニンゲルに言及しています。ベルジャーエフによれば、この不幸な若者は孤立無援のまま、その哲学的暗中模索により、性のおそろしさからの救いを求めて、両性具有の理念に近づいていった。陥罪により人間から離反した女性的自然力が、偽りの悪しき性欲の対象となることで、人間の隷従の源となったという宗教的真理を、彼は彼なりに予感したのだが、キリスト教徒ではなかった彼は、神の似姿としての両性具有、性の罪を贖う愛という宗教的奥義にまでは、遂に達することがなかったのでした。

要するに、ワイニンゲルはベルジャーエフと違って、その所説にキリスト教的衣裳を纏わせることはしませんでしたが、実質的には二人は非常によく似たことを言っています。

ワイニンゲルによれば、女とは男が創ったものです。男と女はちょうどフォルムとマチエールの関係にある。マチエールはそれ自体なにものでもない。フォルムのみがこれを実在となしうる。絶対的な女というものは本来個性も意志ももたぬ自然そのものである、とワイニンゲルは言います。その生は、必要を満たすという本能の内に、とりわけ繁殖の要求に従うという性本能の内に発現する。「女は常に、専ら性に憑かれている。女は肉体的にも心理的にも性にほかならず、性そのものである。さらに女は、常にあらゆるものと、全身をもって性的関係にある。女は全身これ性に依存するがゆえに、性行為の理念が女の思念の中心を占める。性行為こそ女にとってポジティヴな価値を有する唯一のものであり、かくして女は、肉的結合という理念一般の唯一の担い手である。女が性行為に賦与するこの価値は、利己的感情にとどまらず、概して個人的なものではない。それは何かしら本質的なもの、超個体的なものの現れであり、言うなれば女の先験的機能である。性交は女にとって至上の価値であり、女はこれの実現をめざしてやまない」(『性と性格』第11章)。

言い換えれば、女は種の存続の理念の恒常的な担い手だということです。男が女の内に何かしら永遠なものを見るのはこのためです。女の内には驚くべく寡黙な、強固で安定した種が根を下ろしており、これにより男は自分が世界と結びついていると感じることができる。この安定こそ彼には欠けているものです。男を真に男とするのは、彼を種から引き離し、種を超えて高めるものですから。

男は超経験的・叡智的生によって、物質と時空を超えて高まる。男の内には死すべき部分と不死の部分があり、彼の全意志はこの時間を超えた存在の征服に、絶対的な価値の征服に固執する。これは男の最深の意志であり、彼の不死の要求と一体をなしている。それに反し、女はこの不死の要求を感じない。永遠の生の痕跡は女の内に皆無である。絶対的な女というものは個性も意志ももたず、価値の何たるかを知らず、愛も知らず、それゆえ高次の超越的で形而上的な存在にも関わらない。男なら皆、価値についての或る種の理念をもっている。ただこれを実現できないか、これが完全に実現されるのを見ることができないだけである。それゆえ幸福な男というものはない。女だけが幸福である。

こう見てくると、男と女という二項対立は、実は高次の生と低次の生、主体と客体、フォルムとマチエール、存在と無の二項対立だということになる。女とは自然に埋没した存在であり、無目的で、善でも悪でもなく、没倫理的で没論理的存在です。しかるにあらゆる実在とは倫理的にして論理的実在のことですから、女は実在ではないということになる。

男は彼自身の作品であるとショーペンハウエフが言うとおり、男を形成し変容させるのは男自身の意志です。いっぽう女は外的意志によって形作られる。女を形作るのは男です。女が男から創られたとする創世記の神話、ま

た類似のあらゆる創世神話は、男が女から生まれるとする生物学の理論よりも、遥かに深い真理を秘めている。

女が実在を獲得するのは、男が自らの内なる性を是認し、絶対を否定し、高次の生に背を向け、低次の生へ向かう限りにおいてである。男が自らを性的存在と化した時、男は女を創った。女が存在するということは、男による性の受容と肯定を意味します。女はこの受容と肯定の結果にすぎない。女とは性そのものなのですから。男は自ら性的なものとなり女の対極的存在となることで、女に実在を与える。女が存在する限り、男は性的存在であり続ける。女は、男が性を有する限りにおいて実在する。

女は、男の欲望が創り出した対象にすぎない。女は男の性の対象化であり、肉を纏った性、肉となった罪です。あらゆる男は自らが肉化する瞬間不可避的に女を創り、彼が性的存在である限り女を創り続ける。男は性行為を放棄しないことで、女を助け続ける。女とは男の罪です。しかし女が存在し始めるのは女の罪によるのではなく、男の罪によるのであり、この点で女に浴びせられる非難は、すべて男に向けられるべきものです。

女とは性であり、そして人間は性から解き放たれねばならないというのが、ワイニンゲルの根本思想です。ご覧のとおり、彼は女性に対しすこぶる非好意的な言辞を弄していますが、彼がほんとうに敵視したのは女性ではなく、性そのものなのです。彼は性が人間の大いなる不幸であることを感じ取り、性を怖れ、彼なりの性からの脱却の道を模索したのでした。

ベルジャーエフはワイニンゲルの女性論についてこう言っています——ワイニンゲルには女性心理についての天才的な直観があるが、この直観は、女性的なものへの彼の悪しき薄弱な敵意によって損なわれている、と。またこうも言っています——ワイニンゲルは女性は実在を有しないとして、女性の非実在性について論じているが、しかし現実には、女性も男性に劣らず実在的である。あるいは、男性もまた女性同様に非実在的なのだ、と。つまり陥罪により完き実在を喪失したことでは、男も女も変わりはないのだということです。

9

古代世界は男根崇拝を生みました。男根崇拝は古典古代のみならず世界中至るところに見られる宗教形態ですが、ここに現れているものは、分離した両性を再統合しようとする張りつめた渇望であり、コスミックな性的結合への祈りです。この転落した世界において、男性的なものと女性的なものによる、最大限の接触と結合が可能となる性の一点、つまり性行為が、ここでは神格化されています。性行為は、対極的な二つの性の至高の接点であり、そこでは各々が他の中へ出て行くことで自らの性を乗り越えようとする。これはこの地上にあって、原初の実在への接触が可能となる一点であり、この接触において、男性的なものと女性的なものの境界は忘我の内に踏み越えられる。

しかし、男根崇拝は悲劇的なまでに無力です。この地上での性生活が不可避的にとらざるをえないかたち、つまり性行為そのものが、性の分化転落したかたちであり、自然的必然性の支配下にあるからです。性行為による結合は儚くも一過的であって、常に反動と後退に伴われています。一時的結合のあとには、さらに大いなる隔絶がやってくる。性欲は結合への渇望で人間を苛みますが、この結合は自然的性生活の内では決して到達されることがない。性行為は一者が他者と、肉体においても精神においても完全に融け合うことである筈です。しかるにこの世での性行為は、人間を癒されぬ性欲の悪無限的支配へと従わせるだけです。男根崇拝は人間を救いえず、人

間を自然的必然性の奴隷のままに放置する。これは毒によって毒を癒そうとするようなものです。毒を無力化する解毒剤がどこに存在するのか、男根崇拝は思い至らなかった。男根崇拝は、性の一点が実在の根源との接触であることを感じ取っていたのですが、この性を性行為というかたちでしか思い描けなかった。人々は性と性行為を混同し、天上のアフロディテと卑俗なアフロディテを混同したのでした。しかしベルジャーエフによれば、あらゆる性愛の内には高められ形を変えた男根崇拝がある。男根崇拝は確かに無力であり、人間を奴隷のままに放置しますが、それでも現代人の非宗教化した性生活よりは深い、とベルジャーエフは言っています。

この世での性生活は根本において欠陥を有し、損なわれたものであるというのがベルジャーエフの認識であり、この点で彼は全くソロヴィヨフを踏襲しています。分化した性行為そのものの内に、既に或る欠陥が、病的要素がある。

ベルジャーエフにとって性とは実在の源泉であり、性的対極性は天地創造の根本です。世界過程全体が性に根ざしており、世界の根底には性が存在するがゆえに、つまり世界の内なる自然が分裂し両極化しているがゆえに、世界は創造され存続してもいるのです。

人間もまた性的存在であり、性は人間存在全体に行き渡り、その全細胞に浸透し、生の総体を規定している。性は人間の一部分に関わるのではなく、全体に関わる。性は人間存在の特殊な、分化した一機能(重要な機能には違いないが、いずれにせよ、例えば食物摂取ほどに重要ではない一特殊機能)ではなく、人間全体を捉え規定するなにものかです。分化した性的機能からは逃れることができるし、この機能を否定し克服することは可能です。しかし性から逃れることは決してできない。性的機能を否定したところで、人間は依然性的存在のままであり、ただその性的エネルギーが場所を変えただけのことです。

性行為の禁欲的否定は、性の否定ではない。かえって、性行為のあまりに熾烈な否定は、人間の内なる性の熾烈な発露たりうる。純潔は徹頭徹尾性的現象であり、性的エネルギーが向かう方向のひとつです。純潔において人間の全一性は最もよく保たれ、その性的エネルギーが性行為というかたちで分化した機能の内に発散されることはない。

純潔の対極が淫蕩で、これは性的エネルギーの極度の細分化であり、全一的人間からの性的エネルギーの疎外であり、全一性の喪失です。そして性行為の内には、不可避的に淫蕩の要素がある。なぜならそれは性的エネルギーの細分化であり、性が部分的機能へと変貌することだからです。こう考えてくると、性の深みから性的機能が分化してきたこと自体、人間の転落であり、全一性の喪失であることが分かります。

性愛の奥義は、二つの個体が結びつくことにより、各々が自らの内に、両性具有者としての神の似姿を再興することです。その際愛と生殖は深く対立する。生殖行為において愛は凋落し、愛の内なる一切の個的なものは死滅する。愛を崩壊へ導く種子は、既に性行為の内にある。性行為は個に対して徹頭徹尾敵対的であると、ベルジャーエフは考えます。人は性行為の内にあって個であることはできない。性行為の内になんら個的なものはなく、はては人間的なものすら何もない。性的本能とは万人にあって共通な自然的衝動であり、さらに人間界と動物界に共通の自然的衝動です。快楽と充足を求める性行為にあっては、種の利害が自らを貫徹する。性行為は個の外で、種の自然力の内に成就する。単一の肉体への結合という課題は、個を無みする種の自然力の内では達成されない。性行為は常に、個とその期待の部分的破局です。それゆえ永遠を創造する真の愛は、性行為を不可能にし、性行為を乗り越えて別の結びつきへと向かう。

激しい恋がしばしば狭義の性欲に対立し、これを必要としないことはよく知られており、いっぽう性行為への強い嗜好はしばしばいかなる恋とも無関係であり、時として嫌悪を前提としさえする。このことはワイニンゲルも指摘していました。

ワイニンゲルによれば、性的本能と愛が同じひとつのものであり、ただ前者の洗練され美化され昇華されたものが後者であると考えるのは、全くの誤りである。たとえカントとショーペンハウエルがそう考えたところで、誤りである。カントは性も愛も知らなかったし、ショーペンハウエルは性しか知らなかった。愛はそこにいかなる禁欲的意志の介入がなくとも、それ自体性行為の敵対者であり、否定者である。愛と欲望は二つのあまりに異なった状態であり、互いに排除し合う関係にあるから、男が真に愛する場合、肉体的関係のことは考えられない。男が愛すれば愛するほど、性的本能がその愛を妨げることはない。それゆえ「自らが欲する女を愛していると言う男は、嘘をついているか、あるいは決して愛したことがないのであり、同様に、結婚において愛を云々することも殆ど常に偽善である」。ワイニンゲルはまた、「プラトニックな愛というものは確かに存在するのだ。というより、愛はプラトニックなものとしてしか存在しない」と言っています。

純潔たることは、人間の内なる性的エネルギーを最もよく保つ道であり、ここにおいて他者との結びつきへの渇望は最高度に燃え立ちます。いっぽう淫蕩は、あらゆる結びつきの対極です。淫蕩とは離れ離れにすることであり、それは常に性欲の対象を目的ならぬ手段へと変貌させます。つまり自らの対象への愛着を、性行為そのものないし愛の技そのものへの愛着ですり替える。個人への愛に取って代わる愛への愛――これが淫蕩の心理構造です。そこには誰との結びつきもなく、結びつきへの渇望もない。一なる肉体への融合をめざす愛の代わりに、性行為への愛――これが淫蕩の生理構造です。フロイトの言う自体愛Autoerotismusはすべて淫蕩であると言えます。淫蕩は結婚の内にもありうる。愛する者同士の結びつきが目的となっていないところ、対象への愛による透入が目的となっていないところには、どこにでも淫蕩はあります。肉欲それ自体は未だ淫蕩ではない。淫蕩なのは引き離す肉欲であり、結びつける肉欲は神聖です。通常の概念では、許されぬ形態による性的結びつきが淫蕩と呼ばれますが、実は結びつきの欠如こそが淫蕩です。性行為は、それが十分には深く結びつけないがゆえに、多かれ少なかれ淫蕩です。

10

両性具有者の転落が処女ソフィアの喪失であり女性エヴァの出現であったというのが、ベーメのソフィア論の骨子でしたが、このことに照らしてはじめて、イエスが女性を知らなかったのはなぜか、どうやらその生涯において婚配の機密(正教用語。カトリックでは婚姻の秘蹟)を行わなかったらしいのはなぜかが明らかになる、とベルジャーエフは言います。原初のアダムもまた女性を知らず、婚配の内には生きなかった。イエスは自らの内に男性的なものと女性的なものを統合することで、両性具有像を再興していたのであり、彼は「娶らず嫁がず、天使のように生きる」絶対的にして完全な人間、自らの内に処女を取り戻した男＝処女でした。

人間に対する種の自然力は、人類の始祖たる女性エヴァを通して世界を支配しました。エヴァの誕生は、旧きアダムを種的性衝動の支配下に置いた。人間は多産なるエヴアに執着することで、自然的必然性の奴隷となった。エヴァとは、女性的なるものの自然的・種的本質です。旧きアダムはこのエヴァからいかにしても逃れることができない。これから逃

れうるのは新たなアダムのみです。この新たなアダムは、旧きエヴァから生まれたものではありえない。自然的必然性が多産なる性の一点を通して人間を支配している以上、新たなエヴァを産むのは旧きエヴァではなく、自然的必然性から解き放たれた「永遠に女性的なるもの」であり、この新たなエヴァは、もはや男性との性行為によって産むべきではない。旧きアダムの転落が世界の内に性行為による種の王国をうち建てたとするなら、新たなアダムは聖神(正教用語。カトリックで言う聖霊)により身籠った処女からのみ生まれえた。転落した人間への女性的自然の支配が女性たるエヴァを通して始まったとするなら、この自然による支配からの人間の開放は、処女マリアを通してのみ始まる。

キリストの宗教、新約の説く宗教とは、種を否定し、聖神によってのみ産む処女性の崇拝をうち建てるものであるというのが、ベルジャーエフのキリスト教観です。新約の啓示とは、何よりも先ず個たることの啓示であり、種からの脱却、種による必然性からの脱却を説くものであり、性行為を性の転落として、罪として否定し、それゆえ家族をも否定するものです。

家族とは社会的制度であって、国家や経済同様、種の法則に従う。人類は自らの種を存続させ整備してゆく過程で、自然の混沌状態と性の無秩序に対し、一定の独立を保たねばならなかった。現実への不可避的順応として、合法的・標準的性なるものを形成する必要があった。種に関すること、つまり人類の存続に関することはすべて、法による規制を受けることとなったわけです。

家族とは常に、産むための性行為を不可避のものとして受け容れることであり、性の重荷に服従することで、性行為の罪を道徳的に贖うことです。家族の根底にあるものは転落した性であり、分化したままの性行為であり、純潔の喪失です。家族は転落した罪深い性生活を、生殖により宗教的・道徳的・社会的に正当化するものであり、また生殖のために興る。それゆえ家族にあっては、性行為の行われる男女の結びつきのみが正当なものと認められています。性行為なくして生殖はない。つまり、そのためにこそ家族が存在するもの、それがないことになる。

家族とは種のための制度、種のための安寧秩序です。しかるに新約の啓示とは、種の自然力を乗り越えるものです。種的安寧秩序の法たる家族の法が新約に由来しないこと、国家の法が新約に由来しないのと同様です。キリスト教的国家がありえないように、キリスト教的家族なるものも本来ありえない。この点でベルジャーエフはトルストイ主義に接近します。

11

歴史的キリスト教、つまり教会キリスト教の性愛に対する態度は二重です。教会は、一面では新約の精神に則って性行為を罪と見なし、純潔を理想として掲げる。カトリック教会にあって聖職者は独身であり、正教会においても高位聖職者は独身を義務づけられています。

しかし他面、教会は罪深い人間が性行為を完全に克服しうるとは信じず、俗人のためには法に適った家族の形成を許し、合法的結婚を制定しました。これはキリスト教の側からする、種的自然力への譲歩であり妥協でした。教会は、人々が罪の内に産むこと、自然的・種的秩序の内での両性の結合が罪であることをよく知っているのですが、この罪を罪の結果への服従によって弱め、その罪を取り除こうとするのです。人々が品行方正な性行為の内に子供を産むように、というのが教会の希望です。

つまりキリスト教の性に対する態度とは、禁欲と、合法的家族の二点に集約されます。

このうち真に深い宗教的意味を有するのは禁欲のみであり、合法的家族とはこの世の種的秩序との妥協にすぎないのですが、その際教会は、人々の性生活の内面には何ら立ち入ることなく、この性生活の生理的結果たる生殖と、社会的結果たる家族を、いかに組織するかにのみ心砕くこととなりました。これは国家や社会が、性愛を専ら生理的・社会的観点から捉えるのと同じ態度です。

教会は性生活を個ならぬ種に関わるものとして、専ら生理的・社会的現象として捉えることで、当事者二人の愛の問題には何ら介入しえない立場にあるにもかかわらず、婚配機密を制定し、結婚は永遠にして不壊であり、破棄できないものであるとしました。ここからキリスト教世界にこの上ない悲劇が生じた。

婚配機密が他の六つの機密と異なる性格を有することは、古くから指摘されてきました。機密は常に個人の内密な生に関わるものですが、婚配機密のみはそうではない。この機密は、精神的内容を欠いた空虚な儀式に堕する可能性を、多大に秘めている。よい例が離婚問題です。

機密としての結婚は永遠であり破棄できないとして、教会は基本的に離婚を禁じています。カトリック教会はこんにちもこれに固執し、帝政時代のロシアにあっても離婚は格別に困難でした。ロシアではローザノフが離婚の容易化のために論陣を張りましたが、ベルジャーエフにとっても、離婚の禁止ほど残酷な制度はありません。

結婚が永遠で破棄しえないのは、それが両性具有の再興という永遠の本質を有している場合、人が予め定められた相手を見出した場合のことであって、福音書はこうした絶対的な男女の結合のことを、神の国と呼んでいます。これを外的な法として制定し、現実の生に適用するのは誤りです。現実の夫婦のほとんどは、こうした永遠の愛による結合を欠いているのが実状ですから。結婚が機密であるのは、その内容が神の国へ至る無二の愛である場合のみであって、こうした愛に基かない結婚と家族は社会的・法的制度にすぎず、機密ではない。これを機密と見なすことは、結婚を単なる儀式へ、形式へと堕せしめることです。

ベルジャーエフによれば、ほんとうの問題は離婚の権利を認めるか認めないかではない。この権利はもちろん認められねばならないが、ほんとうに認めらるべきは、愛の終熄に際しての離婚の義務である。愛のないところに結婚生活を続けることこそ罪だというわけです。

性に対するキリスト教の態度が二重であることは、処女性の問題にも現れています。キリスト教は処女性の崇拝を前面に推し出し、これを処女マリア崇拝と結びつけました。処女性は個の問題と結びついており、これはキリスト教が性の問題に深く対処した唯一の点です。しかし同時にキリスト教は、結婚を正当化する唯一の目的として生殖を掲げることで、処女性の喪失を結婚の不可欠の条件としています。結婚の意味と目的は生理的なものとなり、処女性の喪失、つまり人間の高次の状態の喪失を要求することとなった。しかるに処女性の喪失とは、キリスト教にとって明らかに、処女性の保持よりも劣った状態なのです。男女の性行為は、女性にとってとりわけ破局的な処女喪失を前提とするわけで、これが人類存続のために要求されているという事実の内に、ベルジャーエフは性における人間の深い転落を見ています。

性に対するキリスト教の態度が二重であり、ここでキリスト教がダブル・スタンダードを使い分けねばならないという事実は、性に対する人類そのものの態度の二重性を反映していると見ることもできます。

12

そういうわけで、キリスト教の内では、種

的な性の禁欲的な否定と、家族というかたちでの肯定とが、共存しているのです。キリスト教にあって性は全く否定されるか、永遠ならぬ悪無限を生む性として肯定されるか、どちらかでしかない。しかしベルジャーエフは、第三の道がある筈だと考えます。性の滅却でも性への服従でもない第三の道、種の必然性からの脱却であると同時に、旧い性の変容であるような第三の道がある筈だ、と。しかしその道は、ポジティヴなかたちでは未だ人類には啓示されていない。福音書にはそのネガティヴな暗示しかない。

例えばマタイ伝十九章に、有名なイエスの言葉「之を受け容れうる者は受け容るべし」というのがあります。夫婦は神によって結びつけられたものであるから、これを引き離してはならない、また、不品行ゆえにではなく妻を離婚し他の女を娶る者は、姦淫を犯すのである、というイエスの言葉を聞いて、弟子たちは「人もし妻のことに於いて斯のごとくば、娶らざるに如かず」と言います。それに応えてイエスは言う、「凡ての人この言を受け容るるにはあらず、ただ授けられたる者のみなり。それ生まれながらの閹人あり、人に為られたる閹人あり、また天国のために自らなりたる閹人あり、之を受け容れうる者は受け容るべし」。

歴史的キリスト教はこの言葉を、キリストによる禁欲主義の唱道であると解しました。キリストは性愛を否定し、去勢を唱えたのだと。ただしこの禁欲的功業は、万人が荷なうべきものとはされなかった。これを「受け容れ」えたのは、選ばれた者たちのみでした。この解釈の上に中世の修道院制度は興りました。

とはいえ、キリストがかくも謎めいた言葉によって説いたのは、実は新たな愛のこと、天上のアフロディテのこと、変容せる神的なエロスのことではなかったかというのが、ベルジャーエフの解釈です。これについてキリストは、誰もがこれを受け容れうるわけではないと言ったのではなかろうか、と。このエロスは性を超自然的なやり方で肯定することにより、性を乗り越える。ただし、これが人類の集団生活によって受け容れられる時代は未だ到来していない。われわれが歴史の内に見るものは、種的で没個的な愛と、肉を欠いた禁欲主義の混合にすぎない。しかしキリストが世界に出現したのは死にうち克つため、したがって産むことにもまたうち克つためだったのであり、時間の内なる種存続のために個体性を滅ぼすのではなく、永遠の内に個体性を確立するためであった以上、第三の道は必ずや人類に啓示されるであろうというのがベルジャーエフの確信です。

L'amour sexuel dans la pensée russe (III)
Vl. Soloviev et N. Berdiaev

AOYAMA Taro

Nicolas Berdiaev réinterprète l'androgyne platonicien sur la base du christianisme. Il assimile l'androgyne à l'homme immaculé avant la chute originelle. C'est la sophiologie de Jacob Boehme qui a influencé profondément Berdiaev dans son androgynisme.

Créé comme image et ressemblance de Dieu, Adam était jeune homme et jeune fille sous un même aspect. Par son désir il découvrit la femme. Boehme fait une distinction entre la vierge et la femme. La vierge était la virginité éternelle de l'homme, la sagesse divine, la Sophia du premier Adam, perdue par lui dans la chute originelle. La différenciation entre élément masculin et élément féminim est le résultat de la chute cosmique de l'androgyne. L'apparition de la sexualité dans le monde est ainsi liée à la chute de l'homme. La sexualité différenciée est la source aussi bien de la discorde mondiale que de l'aspiration déséspérée à l'union, à l'intégralité.

La femme est la porteuse de la sexualité dans le monde. Attaché à l'impulsion sexuelle vis-à-vis de l'Eve génératrice, Adam devient l'esclave de la nature. Le génie de l'espèce domine l'homme à travers la femme. L'homme ne peut plus s'enfuir de cette domination sexuelle. L'issue n'est possible que par l'arrivée du nouvel Adam qui apparaît dans le monde par une féminité nouvelle. Si la domination de la nature féminine sur l'homme déchu a commencé à travers l'Eve ancienne, la libération de cet esclavage commence à travers la Vierge Marie qui n'enfante plus par l'homme, mais par l'Esprit. C'est pourquoi Jésus-Christ, l'Homme absolu, n'a pas connu de femme et, de toute évidence, n'a pas réalisé le sacrement de mariage. Le Christ a restauré de nouveau l'aspect de l'androgyne en réunissant en soi le masculin et le féminin.

*

Le christianisme historique adopte une attitude double vis-à-vis de l'amour sexuel. D'une part l'Eglise considère, selon l'esprit du Nouveau Testament, l'acte séxuel comme péché et la chasteté comme idéal. D'autre part elle permet au séculier de former une famille légale, instituant le mariage légitime, car elle ne croit pas que l'homme pécheur puisse vaincre complètement l'acte sexuel. C'est une concession de la part de l'Eglise à la force naturelle de l'espèce.

De même, l'Eglise met en avant le culte de la virginité et le rattache à celui de la Vierge Marie. Or, en faisant de l'enfantement l'unique fin susceptible de justifier le mariage, l'Eglise subordonne cette fin à l'acte sexuel qui accompagne inéluctablement la perte de la virginité, alors que métaphysiquement elle méprise cette perte, la considérant comme un état inférieur.

Ne voyant dans l'histoire que le mélange de l'ascétisme sans chair et de l'amour impersonnel assujetti à l'espèce, Berdiaev attend une nouvelle révélation qui indiquera la troisième voie dans la vie sexuelle de l'humanité.